２月号

いずみこども園だより

いずみこども園
ホームページ
ＱＲコード

令和８年１月３０日
千代田区立いずみこども園
園　長　　穴　原　江　美

【教育目標】　元気な子ども　やさしい子ども　☆考える子ども

ことばが育てるやさしさの芽

副園長　村田　靖孝

厳しい寒さが続いていますが、暦の上ではまもなく立春です。子どもたちが植えたチューリップの球根も小さな芽を出し始め、冬の空気の中にも春の気配が感じられるようになりました。

本園の新年は神田囃子と獅子舞が訪れ、日本ならではの音色と迫力ある舞で、明るく縁起のよいスタートとなりました。獅子舞に頭を噛まれるとその年は健康に過ごせると信じられており、健やかな成長を願う意味もあるといわれています。子どもたちが嬉しそうに頭を差し出す姿に、これからの一年が温かいものになりそうだと感じました。

先日、心が温まる出来事がありました。トイレから廊下へ出る際、ゆり組の子どもとぶつかりそうになり、私が「ごめんなさい」と声をかけると、その子はすぐに「こっちこそ、ごめんね」と返してくれました。「ぶつからなくてよかったね。ありがとう」と伝えると、にこっと笑って遊戯室へ向かいましたが、その後わざわざ職員室にきて、「さっきはごめんね～」と改めて言葉を届けに来ていました。相手を思いやる心が育っていることを実感し、胸が温かくなりました。

また別の日には、園庭でつばめ組（２歳児）の凧が桜の枝に引っかかり、困っている様子に気付いたゆり組の子どもが保育士に知らせ、一緒に凧を取ろうとする姿がありました。受け取ったつばめ組は「ありがとう！」と照れながらお礼を伝え、ゆり組も「いいよ、また取ってあげるよ」と笑顔で返していました。自然と交わされる優しいやり取りに、異年齢のつながりの温かさを改めて感じました。

園では日々の中で、できるだけ否定語や禁止語を使わず、肯定的な伝え方を心掛けています。「走らないよ！」ではなく「歩きましょうね」、「それはいけません！」ではなく「こうするともっといいね」など、少し言葉を変えるだけで子どもたちの心に柔らかく届きます。『チクチク言葉』より『ふわふわ言葉』が多く飛び交う環境は園全体を穏やかにしてくれます。ＳＮＳで心ない言葉が見られる時代だからこそ、相手を思いやる言葉選びを小さな頃から大切にしてほしいと思います。

最近では、ばら組がゆり組からあいさつ隊やお休み調べの方法を教えてもらっています。ゆり組が優しく丁寧に伝える姿、それを真剣に聞くばら組。そして終わった後に「ありがとう！」と嬉しそうに伝える姿があり、「ありがとう」が次の「ありがとう」を呼び、優しさの輪が広がっていく瞬間でした。

「ありがとう」の反対語は「当たり前」といわれます。どんな出来事も当たり前になってしまえば感謝は生まれません。「ありがたい」と感じる心を大切にし、その思いを言葉にして伝えることが、人と人とのつながりを豊かにします。

当たり前に見える日常の中で、子どもたちは気付き、学び、また誰かに手を伸ばします。その一つひとつの瞬間が、園を少しずつ温かくしてくれます。
小さな「ありがとう」は声の届かないところまで静かに広がり、
誰かの明日をそっと照らす力を持っています。子どもたちの優しさが、
世界にあたたかな風を起こしますように。